

【泉大津市長賞】

はい

多田羅初美・泉大津市

「はい。」と答えた。

新婚旅行から帰った夜のことである。

旅鞄を置くとすぐ「話がある。そこに座ってくれ。」と夫に言われた。

「私の三度の食事を二度にして、一度分を両親に送つてくれ。」と深深と頭を下げられたのである。

結婚をすれば、主人の給料は幸せな家庭を築くため使つたら良いとばかり思っていた。

終戦後、主人の家は朝鮮から家族九人で命からがら引揚げてきた。小学五年生の時だつたという。

長男である主人は、加藤汽船に乗り、姑と雑米を背負つて神戸に売りに行つたとか、雨の日は傘がなくて学校に行くのが辛かつたとか、想像もつかないようなことを時々話してくれた。

母は、「苦労なさつた姑様だから嫁にやれる。」と言つていたことを今も忘れない。

若い主人の給料では、食べるだけがやつとある。私が働かなければいけない。

幸いなことに社宅を泉大津に見つけてくれた。泉大津は繊維の町である。機音がどの路地からも聞こえてくる。

子供たちは機音を子守唄として育つた。

高校を卒業し、花嫁修業として、洋裁学校、編物学校、料理学校、お茶、お花と稽古事に明け暮れていた。

縁あつて叔母の仲人で二十歳の花嫁となつた。嫁ぐまでは、一度として働いたことなどなかつた。

機町は内職にはこと欠かない。毛布は嵩が高くて狭い社宅では無理である。

セーターの内職しかないと考え、セーターの縫製をしている家にお願いに行つた。するとその日から、リングミシンで衿を付けた後の膝をさせて貰えた。

一目一目を膝り、裏返しをして五枚づつ綺麗に重ねて畳むのである。一日約百五十枚は膝つた。白糸の膝は夜なべに回した。

嫌嫌通つた編物学校の実習が役立つことになつたのである。

泉大津は、リングミシンを踏んで生計を立てている家も少なくなかつた。

人が出来るのだから私にできないことはないと、半年後に一台のリングミシンを購入した。

セーター屋さんから織り傷の衿と身頃を、山ほど貰つてきた。

二百本程の針にまず身頃を刺し、その上に衿の目を一目一目刺していくのである。

一目も落とすことは許されない。忽ちに傷だらけの血の滲む指となつた。指の感覚が鈍る故に絆創膏も貼れず、製品を汚す故に、薬も塗れない。血だらけの指で衿を針に刺し続けた。

今も右手の親爪は、動力ミシンの針にも負けなく厚くて醜く変形している。

死に物狂いの稽古であった。でなければ、素直に主人に「はい。」と答えた一語が嘘になつてしまふ。

こんなに親孝行な人は、どこを探しても居ない。立派な人の妻になれたのだから頑張る他にないと心に鞭を打ち続けた。

どうにか一番簡単な、丸首のセーテーを預からせて貰えるまでになつた。

石の上にも三年というが年月を重ねるに連れ少しずつ上達していった。

いつの間にか、ミシンも三台に増えていた。

主人の両親に一月も欠かすことなく、送金してあげることができた。

姑が来てくれる度に、あるだけの預金通帳を見せて「お母さん。これだけ預金ができた

のよ。いつでも言つてね。」と言えるようになつっていた。飛行機で帰つてもらつたりもした。泉大津の市民の一人になれたから、今の私がある。

飾り気のない人人ばかりで、誰もが働き者である。

「はい。」と答えたから、そして泉大津に住むことができたから、本当の幸せを知ることができた。

老眼のすすみ、又停年退職後の夫に機挨だらけの家で過ごしてもらうのは申し訳ないと、四十年縫い続けた内職を断念した。

捨てるのも惜しく、リングをなさつてている方に「幸せを掴む」ことができたミシンです。」と言つて貰つて頂いた。

きつと喜んで下さつていることであろう。

私には勿体無い夫がいて、夫の血を享けた長男長女が、一家を成して近くに居てくれる。機音を聞きながら老い、やがてこの機音の響く大地に夫と永久の眠りにつくことが夢である。